

青年期の抑うつ背景にある孤独感と母子関係

—質問紙調査および投射法心理検査を用いて—

14010PCM 林 紀恵

I. 問題・目的

大学生の主たる年齢層である 10 代後半から 20 代前半にかけては、他の年齢層に比べて抑うつ危険性が高いと言われている。それは、青年期は人生の中で、環境的な変化が多く、ストレスを受けやすいということが指摘できるからである(西河・坂本, 2005)。青年期の心的構造の特徴の第一に「自我の発達」をあげた Spranger は、固有の存在としての自我の発見は、事物および人間から常に島のように離れた一つの独自の世界として発見する事であり、大きな孤独の体験を伴うものである、と述べている(加藤, 1987)。自我の発達過程で、孤独感を体験することは避けられないことであると考えられ、この孤独感が、抑うつに繋がる可能性が考えられる。孤独感と抑うつの間には高い正の相関が認められることについては、先行研究で認められており(堀田・深津, 2004)、親子関係にも強く関係すると示唆される(工藤・西川, 1983)。Oudibert(2012)によると、「誰かのそばでひとりになれる」のは、その子が自分自身と向き合っている証拠である。Winnicott は、子どもは「ほどほどに心地よい」環境に恵まれ初めて自分と向き合えるようになっていっている。この見解は Bowlby(1969)が、母親と幼児の強い情愛の絆のことを愛着と呼び、母子の愛着関係を人格形成の核になるものとみなしたこととも通じるであろう。“人生の早い時期から、自分が必要とするときには愛着を寄せる人物が間違いなく得られると思っている子どもは、安全感と心の内なる確かさの感覚を発達させる”のであり、“愛着の対象が必要なときには得られるという信頼感を発達させた子どもは、その対象から不安を持たずに離れている、という体験を増やしていくことができる”のである(Storr, 1999)。

以上より、本研究では、青年期において、抑

うつの強い者は、母子関係における愛着が低く孤独感が強いという仮説をたて、これを検証する。さらに、母子関係の愛着におけるどのような要因が孤独感につながるかということについても検証する。

II. 研究 1

1. 目的

研究 1 では、抑うつ強い者は、母子関係における愛着が低く孤独感が強いという仮説をたて、これを量的調査によって検証する。

2. 方法

(1) 調査対象者

A 県内の大学に通う学生の計 192 名(男性 57 名、女性 135 名)。そのうち統計可能な計 190 名(男性 57 名、女性 133 名)、平均年齢 19.33 歳(SD = 1.32)に対し分析を行った。

(2) 質問項目

①日本版 SDS 自己評価式抑うつ尺度(福田・小林, 1983)

個人の抑うつの測定のため。20 項目 4 件法。

②母親・父親との愛着体験尺度(久保田, 1995)

子どもの母親に対する信頼や親和的關係が表されている「母親への愛着」因子に相当する項目を使用した。6 項目 6 件法。

③改訂 UCLA 孤独感尺度(諸井, 1992)

社会関係に対する満足感/不満足感の測定のため。20 項目 4 件法。

(3) 実施期間

2015 年の 10 月、大学の授業時間の一部を利用して実施し、授業時間内に回収した。回答の所要時間は約 15 分であった。

2. 結果

相関分析および重回帰分析を行った結果、母子関係における愛着体験は直接抑うつに影響を与えることはないが、孤独感に影響を与え、そ

れを媒介として孤独感が抑うつに影響を与えることが明らかとなった(Figure 1)。

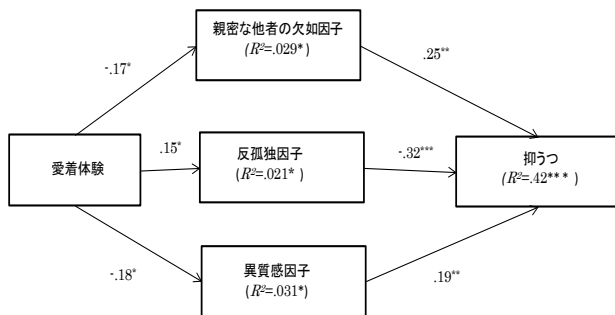


Figure 1 「抑うつ」と「孤独感」、「愛着体験」の関連
*** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$

II. 研究 2

1. 目的

孤独感に影響を与えると考えられる母親との愛着体験を質的に検討する。

2. 方法

(1) 調査対象者

研究 1 の調査対象者の内、11 名(男性 3 名, 女性 8 名)を対象とした。11 名は、研究 1 で用いられた質問紙にある投射法心理検査を用いた調査へ同意した者たちである。

(2) 調査手続き

投射法心理検査として、TAT(主題統覚検査, マレー版)を行った。理由は、絵画刺激の捉え方、物語の作り方の中に、被検査者自身の内的世界の投影が期待され、内在化された人間関係の世界の分析を行うためである。

(3) 分析方法

調査に参加した 11 名を、研究 1 の、「愛着得点」「孤独感得点」「抑うつ得点」の平均値を基準として高群と低群に群分けし、語りの特徴を比較検討した。さらに、「抑うつが高く、母子関係における愛着が低く孤独感が高い」2 名を<高群>、「抑うつが低く、母子関係における愛着が高く孤独感が低い」2 名を<低群>として、両者の語りを比較検討した。

3. 結果

(1) 各変数における両群の比較

①抑うつ

高群では、図版から抑うつの特徴と母子関係

での不和が見られた。低群では、全体的に問題から距離を置くといった対処を行う傾向にあった。

②孤独感

高群では、問題に直面しても解決ができない物語を作ることに対し、低群では問題に対し解決する試みを行う傾向が見られた。

③愛着体験

高群では、主人公以外の対象が存在し、その関係性が語られるのに対し、低群では、主人公以外の存在や関係性が希薄である、喪失感がテーマとなる事が多い傾向にあった。

(2) <高群>の特徴

<高群>と<低群>の特徴の比較から、<高群>は母子関係における愛着体験が希薄であり、さらに母親からの圧迫感を感じる傾向があると考えられる。この圧迫感とは、本人の意思よりも優先される母親の意思、母親からの叱責ではないかと考えられる。Oudibert (2012)によると、一方的な欲求や要求の圧迫と無縁でいられることが、愛着対象の不在に脅かされずに青年期における孤独感に耐えうる力になると考えられるため、母子関係で体験された圧迫感により「ひとりでいられる能力」、つまり母親の不在に脅かされることなく安全感を得られる力の発達が阻害されると考えられる。それがなされていないことで孤独感に耐えうる事が出来ずに、結果的に抑うつを強めるのではないかと考えられる。

III. 総合考察

研究 1 では、相関分析と重回帰分析の結果、母子関係における愛着体験は直接抑うつに影響を与えることはないが、孤独感に影響を与え、それを媒介として孤独感が抑うつに影響を与えることが明らかとなった。

研究 2 では、母子関係で体験された圧迫感により「ひとりでいられる能力」、つまり母親の不在に脅かされることなく安全感を得られる力の発達が阻害され、青年期の発達課題で避けられない孤独感に耐えうる事が出来ずに、結果的に抑うつを強める可能性が示された。